

# 国際ワークキャンプ・大阪

—アジアにおける環境問題と持続可能な発展—

巖 圭 介  
磯 晴 久  
伊 藤 高 章

1. はじめに
2. 開催に至る背景
3. プログラム構成
4. 学生の募集と選考
5. 運営体制
6. プログラムの進行と参加者の反応
7. 実施に際しての発見と反省
8. コペンハーゲンへの旅
9. 結語

## 1. はじめに

2009年9月13日から25日にかけて、桃山学院大学の学院創立125周年・大学開学50周年記念事業の一環として国際ワークキャンプ・大阪が本学キャンパスにて行われた。アジアの聖公会系大学の学生を集めて、環境問題と持続可能な開発をテーマに、約2週間の集中学習をキャンパス内に合宿して行うという初めての試みであった。4ヶ国6大学から22人の学生を集めたこのプログラムは、成果として作り上げた環境に関する学生宣言(「桃山宣言」)を、

プログラム最終日にあたる本学開学記念式典に来学されたカンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズ師の前で発表して幕を下ろしたが、さらには12月にデンマークのコペンハーゲンで開かれた気候変動サミットCOP15（国連気候変動枠組条約第15回締約国会議）に宣言を持参した学生2名を送り込むという展開を見せた。

アジアの聖公会系大学の学生が、ともに一つのプログラムに参加して学びを共有するという試みはおそらくはじめてのことである。これを先例として今後も同様の取り組みが拡大することを願い、ここにその全容を報告したい。

## 2. 開催に至る背景

2008年10月、アジアの聖公会関係大学が立教大学に集まり、CUAC (Colleges and Universities of the Anglican Communion) アジア地域会議を発足させるための会議を行っていた。この際、加盟校の学生を中心とした交流プログラムを実施できないかという提案があり、折しも桃山学院大学が学院創立125周年・大学開学50周年を迎えるということから、記念事業企画のひとつとして実施の検討を始めた。

桃山学院大学では1987年から毎年、インドネシアのバリ島の児童養護施設において国際ワークキャンプと銘打った海外ボランティア体験学習に多くの学生を送り出してきた。施設の改修作業にたずさわったり子供たちの衛生指導をおこなうなど、約3週間の行程を他大学や現地の学生とともに行うこのキャンプは、参加学生に多大な影響を与えてきた。

この伝統をふまえた上で、学院・大学の周年記念という機会に、逆にアジアの学生を日本に迎える形の国際ワークキャンプを行おうと発想したのが本プログラムの出発点である。バリ島での活動を「国際ワークキャンプ・インドネシア」と称することから、今回のプログラムは「国際ワークキャンプ・大阪」と名付けた。当初はその名の通り「ワーク」を中心にするために、身

体を動かすボランティア作業等を念頭に置いていたのだが、アジア諸国から日本に来て環境問題について学ぶ場合、日本人学生が喜ぶような屋外作業よりも、日本の先進技術や自然との共生思想などを学ぶことの方がはるかに意味があるという考えに変わっていった。そのため、できあがったプログラムは「ワークキャンプ」ではなく「スタディキャンプ」と呼ぶべきものになり、海外に募集をかける際に「International Study Camp 2009 in Osaka」という英語呼称を定めることになった。ただ、バリ島でのプログラムとの関連性を維持したいため、日本語呼称は「国際ワークキャンプ・大阪」のままとすることにした。

### 3. プログラム構成

アジアの学生たちが集まって勉強し学び合う場合、それぞれの国の状況のちがいを越えて扱えるテーマとして、環境問題は最適であろう。とくに経済発展著しい多くの途上国にとって、発展を進めながら環境問題にも取り組まねばならない難しい局面にある。そこで、「環境問題」と「人間開発 (human development)」という2つのテーマを設定し、最終的に「21世紀環境と人間開発に関するアジア学生宣言 (桃山宣言)」を作成することを目標として、その上でどのような内容のプログラムが提供可能か検討を始めた。プログラム案を作成するにあたり、まず実行委員数名が集まって、それぞれに自分の関わる分野で思いつく可能な体験・見学研修プログラムや自他による講義などを挙げていった。列挙されたものについて、対象とする学びの内容に基づいてグループ分けをし、グループごとのバランスを考慮して最終的な構成案を作り上げた。

当初は、すでに本学学生を対象に行われている里山保全ボランティア活動や農業体験など、環境問題に関連する屋外体験作業を中心に考えた。こうした作業活動は、知識偏重で育ってきた日本人学生には人気が高いものである。しかし、アジア諸国の学生を対象に行う場合、そのような活動はむしろ日常

の一部になっているかもしれず、それをボランティアや環境教育の一環として行うことの意味を理解することは難しいかもしれない。そこで、そうした野外体験作業も残しつつ、先進技術や知識の習得、さらには問題意識の醸成に重心を移すこととなった。

結果的に、(1) 環境問題の歴史と現状に関する基礎的知識の習得 (おもに講義)、(2) 日本の最先端環境技術の見学 (学外)、(3) 日本における自然と人間の共生のあり方 (体験と講義)、の3つのカテゴリーに属するプログラム群と、それを最終的に統合して学生宣言にまとめあげる3日間のワークショップという構成ができあがった (表1)。また、自国以外の国が抱える環境問題を知るよいチャンスということで、国外からの学生にはそれぞれの国がかかえる問題を紹介してもらい、日本人学生にはその他に縁のある国の問題を調べてもらうこととした。

ワークショップを担当してもらうロイ教授 (Jadavpur University経済学部) は、海外交流担当として何度も本学を訪れられた方だが、2007年にノーベル賞を受賞したIPCC (気候変動に関する政府間パネル) の第4次報告書執筆者の一人であり、今回のテーマをまとめるのにこの上ない人物と考えた。彼女の指導の下に参加学生たちが議論を深め、最終的には学びの結果を「21世紀環境と人間開発に関するアジア学生宣言 (桃山宣言)」としてまとめ、これを最終日に来学されるカンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズ師に上程することを最終目標と位置づけた。

表1：プログラム構成

- |   |
|---|
| <p>(1) 基礎的知識の習得</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・講義「環境問題と人間開発」(本学 巖圭介)</li> <li>・映画「不都合な真実」鑑賞</li> <li>・講義「日本の公害史」(本学 藤田香)</li> <li>・講義「廃棄物問題と日本のリサイクル政策」(本学 竹歳一紀)</li> <li>・講義「空から見た世界の環境」(日本航空出前講座 吉田建夫氏)</li> <li>・講義「現代日本の森林問題の歴史的起源とその構造」(本学 大倉季久)</li> </ul> |
|---|

- ・講義「生物多様性保全」（本学 巖圭介，時間の都合で実施せず）
- （２）日本の最先端環境技術の見学
  - ・産業廃棄物処理総合企業の見学（（株）大栄環境）
  - ・国が進めるエコタウン構想参加企業の見学  
（堺第7-3区にある近畿環境興産（株）と（株）関西再資源ネットワーク）
  - ・さまざまな組織による環境配慮取組の見学（おおさかATCグリーンエコプラザ）
  - ・最新の自動車技術の見学（本田技研工業（株）鈴鹿製作所）
- （３）日本における自然と人間の共生のあり方
  - ・体験「紀泉わいわい村」（YMCA）
  - ・体験「松尾寺竹林整備」（本学 津田直則，和泉市公園緑地課）
  - ・見学「高野山金剛峯寺，霊宝館」（高野山大学 大学院生）
  - ・講義「空海と日本の自然思想」（高野山大学 生井智紹教授）
- （４）まとめと学生宣言の作成
  - ・ワークショップ（Jadavpur University, Prof. Joyashree Roy）

#### 4. 学生の募集と選考

プログラムの概要ができた時点で，日本語と英語の募集要項を作成し，募集を開始した（資料1）。他大学への募集は，アジアのCUAC（聖公会関係大学）メンバー各校に対して行い，各校で最大2名を選抜して派遣するよう依頼した。この際，本学までの交通費は本人あるいは各大学において負担するよう明記した。本学については，大学ホームページで公募した他，実行委員となじみのある学生に対し個人的に声もかけた上で，申し込み者に対し実行委員（磯，伊藤，巖）が面接をして意思確認と英語のレベルをチェックした。全プログラムを基本的に英語で行うことから英語で会話できる能力が必要であると明言したが，実際にはとくに前半については見学先で日本語による解説が多いこともあって，少々会話レベルが低いと思われても参加意欲が高ければよしとした。

結果として，本学以外では海外3校（うち1校についてはすでに交換留学

生として本学滞在中)と国内2校から計9名の応募があった。本学からは外国人大学院生を含め14名の応募があったが、1名は開始までに辞退した。最終的に総勢22名(うち日本人15名)の参加を得られた(表2)。当初最大定員を30名と見積もっていたので、この数字はおおよそ満足のいくものだった。

表2：参加学生の所属と人数

CUAC大学名	男	女	計
Jadavpur University (インド)	1	1	2
聖公会大学校 (韓国)	1	1	2
Trinity University of Asia (フィリピン)	2	0	2
立教女学院短期大学	0	2	2
プール学院大学	0	1	1
桃山学院大学	7	6	13
合計	11	11	22

## 5. 運営体制

本プログラムは、その萌芽段階から関わってきた磯と伊藤によって立案され、テーマを環境問題と定めてからは巖が研修内容の検討に加わった。周年記念事業の一環として行われたため、実施にあたっては、学長事務課、周年記念事業局、キリスト教センター事務課が協力し、それぞれから実行委員を選出した。事務所管としてはキリスト教センター事務課を窓口とした。プログラム実施にかかる経費、およびCOP15への学生派遣にかかる経費は、記念事業費から支出された。プログラムに係るおもな費用は、講師謝礼、食費、および移動のためのバスチャーター代である。

13日間のプログラム中、参加者の宿泊と毎日3食の食事はすべて大学の負担で手配した。宿泊はキャンパス内の合宿所を確保し、食事は基本的に学内の食堂に依頼したが、ときには弁当を手配したり、また外で自由に食べたあ

と一定額を上限に還付した場合もある。実際には参加者の中に本学学生も多く、自宅等から通うことのできた者は多かったと思われるが、しかし生活を全日程ともに過ごしたことが、参加者どうしの交流と結束を深める上できわめて大きな効果をもたらしたことは疑いない。また、キャンパス内に宿泊していることから、夕食後の時間をさらなる学習やその日の振り返りにあてることもでき、またグループで課題に取り組むことも可能であったため、きわめて生産的な毎日を送ることができた。

毎日のプログラムは基本的に8時の朝食のあと9時から始まり、昼食、夕食をはさんで夜9時まで行った。むろん、学外見学の場合には早くに出発することもあり、また週末には夕方以降を自由時間としたこともあった。夜の時間は、その日の学びを振り返り記録に留めておくReflection sheet記入のため、必ず一定の時間を確保するようにした。

もうひとつ学びの内容を記録に留めるための工夫として、専用のブログを用意した。グーグルが提供している無料ブログサービスを利用して巖が作成し、毎日のプログラム内容を記入する。それに対し、参加者はコメントの形で各々グループごとの感想を書き込んでいく、という形をとった。参加学生には期間中全員にノートパソコンが貸与され、キャンパス内では無線LANでいつでもインターネットに接続できる状態であった。これにより、学生たちがお互いの想いを共有することができた。さらには、毎日の記録の蓄積にもなり、また後半に入ってから来日したロイ教授（ワークショップ担当、Jadavpur大学)に、プログラムの進行状況を把握してもらう一助にもなった。

## 6. プログラムの進行と参加者の反応

全日程の毎日のスケジュールは、資料2を参照されたい。

期間の前半は、毎日見学と講義、さらに国別報告にふりかえり、と詰め込まれたプログラムをこなすだけで精一杯の毎日であった。参加者たちはみな一様に非常に積極的で、どのプログラムに対してもなみなみならぬ興味を見

せて、食いつくように質問する姿が印象的であったが、時間的余裕が少なく消化しきれない部分もあったと思われる。一段落したのは6日目の9月18日、紀泉わいわい村の古民家で一泊したときであった。夜になっていろりを囲み、ろうそくの灯りのもとで参加者が一人ずつ想いを語りあった。英語の能力不足からそれまで十分理解できなかつたり意見を言えなかつた者も、他の参加者の助けを借りて自分を出していけばいいのだと気づいた。また、当初個人的な目標としては環境について学んで他の参加者と仲良くなればいい、という程度にとらえていた者も、学びを次の行動に移し社会に働きかけていくべきだと気づき始めた。全体を通して、このときがひとつの転換点になったように思う。

これ以降、参加者たちは情報を受けとるだけの態度から一変し、最終的な学生宣言の作成に焦点を当てたより創造的な姿勢になった。ロイ教授による英語でのワークショップは、参加者にとってまったく初めての経験であり当初はとまどいもあったが、ときおり講義をはさみながら、グループごとに発信すべきメッセージをまとめていく作業に取り組んだ。ロイ教授の要求するレベルと自分たちの意図していたものとの乖離に悩みつつ、丸三日かけてついに学生宣言を完成させた。

最終日9月25日は、午前中にプレゼンテーション準備を完了し、午後は国際フォーラムと記念礼拝に参加。夕方18時半から、カンタベリー大主教ローワン・ウイリアムズ師の前で、プログラム紹介と参加者全員による「アジアにおける環境問題と持続可能な発展（桃山宣言）」（資料3）のプレゼンテーションを行った。ウイリアムズ師からは、大変に好意的なコメントをいただくことができ（資料4）、一同大満足のうちにすべてのプログラムが終了した。

プログラム終了後に参加者に対して行ったアンケート調査の集計結果を資料5にまとめた。おおむね好意的な反応であるが、英語能力・知識・経験のばらつきにより、反応もまたそれぞれに異なることが読み取れる。

## 7. 実施に際しての発見と反省

期間中前半のプログラムは、大学外での見学と、帰ってきてからの講義、さらに夜は各国の環境問題の発表と盛りだくさんの毎日で、多くの場合スケジュールに時間的余裕がなかった。とくに17日のエコタウン・エコプラザ見学では昼食の時間もろくに確保できず、エコプラザの見学も30分しかとれないなど、余裕のなさが際だった。日程的に他に選択の余地はほとんどなかったが、一部内容を削減して余裕を作るべきだったかもしれない。たとえば本田技研工業の見学は、場所が遠いため移動時間が非常に長いわりに、機密扱いの部分が多く見学内容が限られていて、満足度は低かった。

国際と銘打ちながら実際には22人中15人が日本人という状況のため、当初は外国人学生との間の溝や日本語の多用といった問題を予測したが、それは杞憂に終わった。多くの日本人学生が留学経験を持っており、また留学生チューター会で外国人学生と接し慣れている者もいて、最初から親しく交わり分け隔てない関係が構築された。各プログラムだけでなく、食事も宿泊もすべて共に過ごしたことも大きな要因であると推察される。

## 8. コペンハーゲンへの旅

国際ワークキャンプ・大阪としてのプログラムは、カンタベリー大主教の前で「桃山宣言」を発表して終了した。しかし、発表を聴いたローワン・ウィリアムズ師がコメントの中で、このメッセージを12月にコペンハーゲンで開かれる気候変動会議に自ら携えていこう、と述べられた（資料4）ことから、同会議にキャンプ参加者を派遣するという考えが実行委員の間で浮上した。

気候変動サミットCOP15（国連気候変動枠組条約第15回締約国会議）は、2009年12月7日から18日までデンマークのコペンハーゲンにおいて、地球温

暖化問題に国際社会がどのように取り組むかを話し合う大きな会議である。とくに、先進国の取組を定めた京都議定書の約束期間（2008～2012年）以降の取り決めに決定するきわめて重要な会議になるということで、世界的にも注目を集めた場である。学生がこのような場に行ったからとて何ができるというわけではないが、国際会議に付随して多くの団体が内外でサイドイベントを行っており、そうした場で他国の若者と交流を深め見聞を広め、あわよくばワークキャンプの成果である「桃山宣言」を世界に対してアピールするチャンスもあるかもしれないと考えたのである。

急遽持ち上がったこの計画は幸いにも周年記念事業のひとつとして認められ、2名のキャンプ参加学生を付き添い巖とともに派遣することが正式に決定された。COP15に参加する世界中の若者を集めて話し合いをする青年会議（Conference of Youth, COY）の企画がCOP15の直前にあることがわかったため、青年会議に出席したあとCOP15の初日だけ見学して帰国する1週間の派遣になった。COP15に参加するためにはNGO等に属する必要があったため、NPO法人地球環境と大気汚染を考える全国市民会議（CASA）の代表団リストに加えてもらうこととなった。

2009年12月3日に日本を出発し、5-6日の青年会議には学生のみ出席。7日のCOP15初日には、これから始まる大国際会議の雰囲気を味わうのみに終わり、8日に現地を離れた5泊7日の旅であった。行ってみれば、思っていたようなアピールの機会もなく、またカンタベリー大主教に再会できたわけでもなかった。しかし、現地での出来事、風景、印象などは、インターネット上のブログとソーシャル・ネットワークを通じてワークキャンプのメンバーと常時共有され、いやがおうでもメンバーのCOP15への関心を高めたに違いない。帰国してからの報告会も計画されており（2010年1月22日）、ニュースで見る国際会議の結果と自分たちとのつながりを意識させるという点では、大きな成果を挙げられたと考える。

## 9. 結語

13日間の集中合宿というこの国際ワークキャンプ・大阪は、参加した学生にとっても、また担当した教職員にとっても負担の大きなものであったが、それだけに完遂した達成感は大きなものがあつた。英語を基本とするプログラム、しかも単位にならない課外授業であるにも関わらず、きわめて志の高い学生が集まり最後までひとりも落後せずやりとげたことに、驚きと誇りを感じずにはいられない。

このようなプログラムが可能になったのは、周年記念事業という特別な機会ならではということはいふまでもない。記念事業に位置づけられたおかげで、多くの職員による手厚いサポートを受けられた。それなしには実現は困難であつただろう。またこのような機会でなければ、最後に宣言文をカンタベリー大主教に上程するというような決定的な目標も設定できず、またそれがなければ学生が国際会議に参加するという展開もなかつたのである。そうした意味でこの国際ワークキャンプ・大阪は、二度とないめぐり合わせの中で成立した夢のようなひとときだつたと言えよう。

「桃山宣言」を完成させ、カンタベリー大主教の前で発表した時点で終わってしまったワークキャンプ。そこで完結して、一種の喪失感におそわれていた学生たちであるが、仲間がCOP15に行き、そこでさまざまな形で活躍する世界中の若者たちの話を見聞きすることによって、まだまだ自分たちにもやるべきことがあると気づく機会を得た。その点において、コペンハーゲンへの旅はこの国際ワークキャンプ・大阪を補完し、参加した学生たちの目を世界に向けるという重要な役目を果たしたのである。

## 謝辞

このプログラムを可能にしてくれたすべての関係者に感謝します。とくに講師の方々、見学を受け入れてくださった企業の方々、サポートしていただ

いた職員の方々に心より御礼申し上げます。

**参考**

国際ワークキャンプ・大阪公式サイト International Study Camp 2009 in Osaka  
<http://www.andrew.ac.jp/sociology/teachers/iwao/isc2009/index.html>

参加者との写真が掲載されたカンタベリー大主教のホームページ  
<http://www.archbishopofcanterbury.org/2545>

資料1：募集要項（日本語）

桃山学院創立125周年大学開学50周年記念 国際ワークキャンプ・大阪

募 集 要 項

みなさまに、国際ワークキャンプ大阪への参加を呼びかけられることをうれしく思います。

桃山学院大学は今年2009年、学院創立125周年・大学開学50周年を迎えます。これを記念して、アジア各国の学生たちに本学へ集まってもらい、環境問題と持続可能な開発・発展について人間開発の視点から考える2週間のワークキャンプを行います。

世界のどの国にとっても環境問題と持続可能な開発は大きな問題ですが、とくにアジア諸国にとっては、人口増加と経済発展が進む中、ただちに対処していかなければならない課題であることは間違いありません。幸いにして日本は、他国に先行してきた経験と高度な技術力により、多くの問題に対し解決の手段を有しています。また、豊かな自然と共生していた歴史を持ち、今また新しい共生の形を模索しているところでもあります。

こうした日本の技術・思想・取り組みを、これからの時代を担う各国の若者たちとともに学び、分析し、議論し、それをもとにしてこれからのアジアが目指すべき未来を見いだすことが、このワークキャンプの狙いです。国の置かれた状況も背景もそれぞれに異なる各国の学生たちとともに学ぶ喜びを共有しようではありませんか。

国際ワークキャンプ・大阪実行委員長 巖 圭介  
(桃山学院大学社会学部准教授)

テーマ：「アジアにおける環境問題と持続可能な発展～人間開発の視点から」

主 催：桃山学院大学国際ワークキャンプ実行委員会

事務局：チャペル事務室 0725-54-3131（代）

同キャンブ E-mailアドレス isc2009@andrew.ac.jp

会場：桃山学院大学（宿泊：基本的に本学施設を利用）

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1-1 TEL0725-54-3131

日程：2009年9月13日(日)午後3時、開会礼拝をもって開始～25日(金)

募集定員：30名（日本のCUACアジア会議加盟大学から1～2名の参加を期待しております。）

言語：英語

費用：桃山学院125周年大学開学50周年記念企画として、キャンブ中の滞在費用、研修費用、移動費など本学で負担します。居住地から本学までの往復交通費については、本人負担か、各大学で支援ください。尚、部分参加の場合、実費を負担して頂く事があります。

申し込み先：7月31日までに、桃山学院大学チャペル事務室 isc2009@andrew.ac.jp宛メールにて、学生氏名・所属大学・学部・学年・年齢・本人連絡先・大学連絡先を明記してお申し込みください。スケジュール・資料など送付いたします。

※問い合わせは、桃山学院大学チャプレン磯まで。(revdiso@andrew.ac.jp)

#### ☆プログラム概要

1. 講義による研修の機会を持つ。(生物多様性、環境社会学、環境政策、環境会計 など)
2. 特別講演会の開催〈会場：高野山大学 同大学前学長生井智紹氏「空海と日本の自然思想」(仮題)〉〈JAL講演会「空から見た世界の環境」〉
3. 参加学生が、自身の出身国や地域の抱える環境に関する問題やその取り組みについて報告し、世界がかかえている問題について理解を深め、討論する。
4. 日本、特に関西で行われている環境問題への取り組みについて学ぶ。(ホ

ンダ鈴鹿工場訪問，大栄環境訪問，紀泉わいわい村でのエコ体験，本学教授の指導の下，里山活動体験などフィールドワーク・リサーチ・報告会を行う)

5. 特別講師としてJoyashree Roy氏を招き，講演，およびディスカッションの指導を頂く。

〈本学協定校Jadavpur大学経済学部教授・学部長，国連気候変動に関する政府間パネル（IPCC，2007年ノーベル平和賞）第4次評価報告書構成委員〉

6. この企画の目標として，「環境と人間開発に関するアジア学生宣言（桃山宣言）」を作成する。これを来日中のカンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズ師に上程し，会見の時を持つ。

資料1：募集要項（英語）

**Call for Participation**  
**International Study Camp**  
**on**  
**The Environment and Sustainable Development**

13<sup>th</sup> Sept~25<sup>th</sup> Sept, 2009

A Golden Jubilee Program for the Asian Chapter of CUAC  
Momoyama Gakuin University, Osaka, Japan

Program Director:  
Keisuke Iwao, PhD  
Associate Professor, Faculty of Sociology

We are pleased to invite you to the International Study Camp on the Environment and it's Sustainability held at Momoyama Gakuin University, Osaka, Japan. The focus of this program is to promote an active discussion among young Asian students on the common environmental concerns that determine the future of humanity.

Densely populated, Asia is one of the primary areas that will determine the future of the global environment and it's sustainability. Meanwhile, climate change will deeply affect human development aspects of developing Asian countries. We must work together to educate young Asian students to understand these problems and to create a vision for a more desirable future.

Fortunately Japan, drawing from its past experience, has knowledge and technology that can help us arrive at solutions for some of these issues. Also Japanese people have established a philosophy of living together peacefully with nature. We will provide a range of lectures, field trips and

activities to address these problems. The experience in this program should give your students a rare occasion to nurture their vision for the future.

### **Occasion**

The Momoyama Gakuin School Corporation was founded 125 years ago by an Anglican missionary of the Church Missionaries Society in Osaka, and the university was established in 1959. Momoyama Gakuin University (which is also known as St. Andrew's University) celebrates its Golden Jubilee in 2009.

The International Study Camp Program, a part of the Golden Jubilee project, is for the students of universities that constitute the Asian Chapter of Colleges and Universities of Anglican Communion (CUAC-Asia).

The Program will be concluded with the presentation of "Asian Students' Declaration on Environment", our study outcome, to the Archbishop of Canterbury who will be present at the ceremony on 25<sup>th</sup> September.

**Theme:** The Environment and Sustainable Development in Asian Countries

—from Human-development perspective—

**Venue:** Momoyama Gakuin University, Osaka, Japan

**Date:** 13<sup>th</sup> Sept~25<sup>th</sup> Sept, 2009

**Language:** ENGLISH

### **Program:**

- 1) Lectures (include: Environmental policies, Environmental sociology, Biodiversity, Japan Airlines' lecture "the Earth from the Sky")
- 2) National Reports presented by participating students,
- 3) Field trips (include: Japan's leading recycling factory, Honda Car Company)
- 4) Special Study on Japanese Religion and Environment at Koyasan

- (UNESCO World Heritage), guided by *the Revd. Prof. Dr. Chisho Namai*\*
- 5) Academic Reflection led by *Professor Joyashree Roy*\*
  - 6) A Declaration presented to *the Archbishop of Canterbury*

\*Guest Faculty

The Revd. Prof. Dr. Chisho Namai,

Professor of Esoteric Buddhism and Former President of  
Koyasan University

Prof. Dr. Joyashree Roy,

Professor and Head of the Department of Economics,  
Jadavpur University;  
a member of the Fourth Assessment Report (AR4) of the  
Inter- Governmental Panel for Climate Change (IPCC) of  
UNFCCC.

### Cost

- 1) Tuition, Full-board, Accommodation for 2 students from each CUAC-Asia member university will be provided by Momoyama Gakuin University
- 2) Travel fair between students' home and Kansai International Airport, Osaka Japan, must be provided by the participating students or by the CUAC-Asia member university.

### Registration

- 1) Each CUAC-Asia university can nominate up to 2 students to this program
- 2) Name, Sex, Date of Birth should be sent to Dr. Iwao as early as possible
- 3) We need to be informed of the applicant's Passport Information together with a photo, address, telephone number, E-mail address and other details of the participating students by 31<sup>st</sup> July, so that we can mail the formal acceptance letter to the participating students by the 2<sup>nd</sup> week of August.

アジアにおける環境問題と持続可能な発展

Keisuke Iwao, PhD

E-mail: isc2009@andrew.ac.jp

FAX: +81-725-54-3210 (Chapel office)

Post: c/o Chapel Office

Momoyama Gakuin University

1-1 Manabino, Izumi, Osaka 5941198, JAPAN

資料2：スケジュール（日英併記）

国際ワークキャンプ大阪2009 日程表

ISC2009 TIME TABLE

DATE	DAY	TIME	PROGRAM	プログラム
9/13	SUN	15:00	Opening ceremony	開会礼拝
			Orientation	オリエンテーション
		18:00	Welcome supper (with vice-president KINOSHITA, MGU)	夕食 (木下副学長臨席)
		20:00	Opening session	オープニングセッション
9/14	MON	8:00	Breakfast	朝食
		9:00	SESSION 1a: Introduction	セッション1a：イントロダクション
			— Lecture "Environmental issues & human development" (by Keisuke IWAO, MGU)	— 講義「環境問題と人間開発」(巖圭介, 本学)
			— Movie "The Inconvenient Truth"	— 映画「不都合な真実」鑑賞
			— Comments and opinions	意見交換 わかちあい
		12:30	Lunch	昼食
		13:30	Guided campus tour	学内オリエンテーション
		15:00	SESSION 1b: National reports from participants (30 min. presentation & 15 min. Q & A for each country)	セッション1b：参加者の国別報告 (各国プレゼン30分+質疑応答15分)
		18:30	Supper	夕食
		19:30		
9/15	TUE	8:00	Breakfast	朝食
		9:30	FIELD TRIP 1: Daiei Environmental Company	見学研修1：大栄環境株式会社
			— Izumi Recycle Center	— 和泉リサイクルセンター
			— Izumi Landfill	— 管理型処分場
		~14:00	— Izumi Recycle Nature Park	— 和泉リサイクル環境公園
		15:00	SESSION 2: Lectures	セッション2
			2-1. History of pollution in Japan (by Kaori FUJITA, MGU)	講義2-1. 日本の公害史 (藤田香, 本学)

桃山学院大学キリスト教論集 第45号

DATE	DAY	TIME	PROGRAM	プログラム
9/15	TUE		2-2. Wastes Problems and Recycling Policies in Japan (by Kazuki TAKETOSHI, MGU)	講義2-2. 廃棄物問題と日本のリサイクル政策 (竹歳一紀, 本学)
		18:30	Supper	夕食
		19:30	Discussion and report	振り返り
9/16	WED	7:00	Breakfast	朝食
		8:30	FIELD TRIP 2: Honda Motor Co., Ltd., Suzuka Factory (Suzuka city, Mie Prefecture)	見学研修2: 本田技研工業鈴鹿製作所
		18:00	Back to MGU Campus	大学到着
		18:30	Supper	夕食
		19:30	Discussion and report	振り返り, 追加国別報告
9/17	THU	8:00	Breakfast	朝食
		8:30	FIELD TRIP 3: Sakai Eco-Town —Kinki Environmental Industry Co., LTD. —Kansai Saisigen Network	見学研修3: 堺エコタウン —近畿環境興産(株) —(株)関西再資源ネットワーク
		13:00	—ATC Eco-Plaza	—ATCエコプラザ
		14:00	Back to MGU Campus	キャンパス帰着
		15:00	SESSION 3: Lectures 3-1. "Global environment viewed from the sky" (by Tateo YOSHIDA, JAL) 3-2. "The Historical Origin and Structure of Forest Devastation in Japan " (by Suehisa OOKURA, MGU)	セッション3 講義3-1. 「空から見た世界の環境」(吉田建夫, JAL) 講義3-2. 「現代日本の森林問題の歴史的起源とその構造」(大倉季久, 本学)
		18:30	Supper	夕食
		19:30	Discussion and report	振り返り
9/18	FRI	8:00	Breakfast	朝食
		9:15	FIELD TRIP 4: Kisen Wai-Wai Village (operated by the Osaka YMCA) —Learn how they teach kids about nature — Enjoy pre-modern daily life in do-it-yourself setting Stay at the lodge	見学研修4: 紀泉わいわい村 (運営: 大阪YMCA) —環境教育を体験的に学ぶ —昔の生活を楽しむ 紀泉わいわい村泊
9/19	SAT	7:00	Breakfast	朝食
		10:00	Lecture 4 "Preserving Biodiversity " (by Keisuke IWAO)	講義4 「生物多様性保全」(巖圭介, 本学)
		11:30	Lunch	昼食
		14:00	Leaving Kisen Wai-Wai Village	わいわい村出発
		15:00	Back to MGU Campus Free time (Statement draft preparation)	大学到着 自由時間 (学生宣言草稿作り)
		18:30	Supper	夕食
9/20	SUN	8:00	Breakfast	朝食

アジアにおける環境問題と持続可能な発展

DATE	DAY	TIME	PROGRAM	プログラム
9/20	SUN	9:30	FIELD TRIP 5: Matsuoji Temple —Experience bamboo forest management — Learn cooperative nature management among local government, NPO, citizen and students. —Memorial tree-planting ceremony	見学研修 5：松尾寺 —竹林整備の体験 —地方行政とNPO、市民、学生の協働による自然管理について学ぶ —記念植樹
		15:30	Back to MGU Campus Free time (Statement draft preparation)	大学帰着 自由時間 (学生宣言草稿作り)
		18:30	Supper	夕食
9/21	MON	7:00	FIELD TRIP 6: Mt. Kōyasan & Kongōbuji Temple —Koyasan Reihokan Museum, Kongōbuji Temple	見学研修 6：高野山と金剛峯寺 —高野山霊宝館、金剛峯寺
		13:30	— Lecture "Kūkai and Philosophy of Nautre in Japan" (by Prof. Chisho NAMAI, Koyasan University)	—講演：空海と日本の自然思想 (生井智紹氏 高野山大学教授)
		19:00	Back to MGU campus Supper	大学へ帰着 夕食
9/22	TUE	8:00	Breakfast	朝食
		9:00	WORKSHOP1 led by Prof. Joyashree Roy (Jadavpur Univ.)	ワークショップ1 Joyashree Roy氏 (Jadavpur Univ.)指導
		18:30	Supper	夕食
9/23	WED	8:00	Breakfast	朝食
		9:00	WORKSHOP2 led by Prof. Joyashree Roy	ワークショップ2 Joyashree Roy氏指導
		18:30	Supper	夕食
9/24	THU	8:00	Breakfast	朝食
		9:00	WORKSHOP3 led by Prof. Joyashree Roy Asian Students' Declaration on Environment	ワークショップ3 Joyashree Roy氏指導 桃山宣言
		18:30	Supper	夕食
9/25	FRI	8:00	Breakfast	朝食
		9:00	Concluding evaluation	評価会
		11:00	Closing ceremony	閉会礼拝
		12:00	Lunch with CUAC members & MGU presidnet MATSUURA	学長、CUACメンバーとともに感謝の昼食会
		14:00	Forum "A New Trend in Japanese Studies — Images of Modern Japan and Traditional Japan"	国際フォーラム「現代世界のJapanese Studies～世界から見た新しい日本・伝統の日本～」
		17:30	Memorial Service by the Archbishop of Canterbury	カンタベリー大主教による記念礼拝
		19:00	Presentation to the Archbishop of Canterbury	カンタベリー大主教との面会
9/26	SAT	8:00	Breakfast	朝食
			Departure	解散、離日

資料3：桃山宣言（英語）

ENVIRONMENT AND SUSTAINABLE DEVELOPMENT  
in Asian Countries  
INTERNATIONAL STUDY CAMP 2009 in OSAKA

**MOMOYAMA STATEMENT**

Good evening to The Most Reverend Dr. Rowan Williams, The Archbishop of Canterbury, Presidents, Professors, and to our dear guests. It is an honor to have this opportunity to present our statement.

Through sleepless nights, intensive day long brainstorming, tired, over worked and sleepy minds, we were able to create statements that we want the world to hear. Of course without the help of our mentors we would not have made it this far.

**We the Asian students BELIEVE**

- Ours and our future generations' well being is at stake;
- Humanity is facing unprecedented challenges;
- Everyone misuses, overuses and exploits nature. It is in our current human system to undervalue nature;
- There are many ways to solve environmental problems.

**We REQUEST**

- The presidents of our institutions to promote student mobility programs with special focus on environment and sustainable development issues.

**We COMMIT**

- To empower ordinary and socially disadvantaged people, to become aware that their small effort does mean a lot;
- To promote environmental educations at all levels so that ordinary citizens can understand complex relationship between their daily life and global ecological concerns;
- To use efficient energy sources, appliances, and eco-friendly products;
- To take into account the values of ecosystem services;
- To consume only minimum commodities in our daily life and try to reuse and recycle as much as possible.

**We DEMAND**

- All governments to set SUSTAINABLE DEVELOPMENT as goal;
- The national government to design effective environmental policies and incentives, cut in defense budgets and more budgets for the environment, and promote eco-friendly production, consumption and trade;
- Access for youths to the existing environmental database and knowledge and technology;
- Companies to reduce the use of environmental resources;

- An eco-friendly market mechanism that reflects true value of products in the market;
- More eco-friendly cars and eco-friendly public transportations;
- Asian countries must aim to reduce the emission of green house gases;
- Developing countries should commit policy changes;
- Developed countries to share technology with developing countries to solve local environmental pollutions as well;
- Not only environmental goods, but also proper food, safe water, shelter, clothes to wear, education, health equity and no more social discrimination for 100% of Asian citizens within 2012.

### We APPEAL

To each and everyone... Especially, to the youths of Asia  
When going to supermarkets to buy something, what do you care about? Price, quality, calories, what else? Do you ask or look for natural resource use labels? Let us make it a new habit, to know about eco- friendly products.

### We strongly BELIEVE

If all countries of Asia start to work and help one another, definitely Asia will become the greatest. That is what we the Asian youths have been dreaming of.

Thank you for patiently listening to our cause.  
Have a nice day!

西澤 佑悟

*Yusuke Sasaki*

~~*Tomohiro*~~  
中達 勇樹

中村 友美

堀川 大介

*Daigo Horiuchi*

岡村 知香

Tulika Bhattacharyya

*Tulika*

山川 美貴

*Miki Yamakawa*

*Kie Nakamura*

Kie Nakamura

関 菜摘

保田 亜耶帆

藤原 千裕

中嶋 由起

*Nilanjana Pande*

Tadashi Namba

松原 諒

荒木 良

資料3：桃山宣言（日本語）

アジア各国における、環境問題と持続可能な発展  
国際ワークキャンプ・大阪

**桃山宣言**

第104代カンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズ師、各学長、教授、そしてご来場の皆様、私たちの宣言を発表する機会を与えていただき、光栄に存じます。

私たちはたとえどれほど疲れ、寝る間を惜しみ、困難にぶつかっても、仲間と共に力を合わせ、世界に思いを届けるためにこの宣言を作りあげました。また、この宣言を作成するにあたり、様々な助言をくださった先生方には心から感謝しております。

**私たちアジアの学生は知っています。**

- ・ 私たちと、次の世代の生活が危険にさらされていること、
- ・ かつてない課題に人類が直面していること、
- ・ 私たちが自然資源を濫用、または過剰に搾取していること、
- ・ 現在の社会システムそのものが自然の価値を過小評価しており、それが環境問題の原因となっていること、
- ・ 環境問題においては多くの解決方法が存在すること。

**私たちは要求します。**

- ・ 各大学の学長が、環境と持続可能な発展に焦点をあてた学生の交流プログラムを促進すること。

**私たちは以下の実行を約束します。**

- ・ 一般市民や社会的弱者に対し、彼らの小さな努力の積み重ねが大きな意味を持つことに気づいてもらうよう働きかけること、
- ・ 一般市民の日常生活と地球規模の生態危機が複雑に関連していることを理解してもらうために、あらゆる年齢層に対する環境教育を促すこと、
- ・ 効率の高いエネルギー源や設備、そして環境に配慮した製品を使用すること、
- ・ 自然が提供するさまざまな機能に対して、正当な価値をつけること、
- ・ 日常の消費は必要最低限に抑え、可能な限りの再使用とリサイクルをすること。

### **私たちは要求します。**

- ・各国政府が、『持続可能な発展』を目標と定めること。
- ・国家レベルでの各種補助金などの環境政策，防衛費の削減を財源とした環境分野における予算拡大，環境に配慮した製品の生産と消費，及び貿易を推進すること，
- ・若い世代へ，最先端の環境研究と技術に関する情報公開をさらに推進すること，
- ・企業が天然資源の消費を削減すること，
- ・製品の環境価値を反映する市場の構築を推進すること，
- ・エコカーの普及を促進するとともに，環境に配慮した車両等を公共交通機関に導入すること，
- ・アジア各国が温室効果ガス排出量のさらなる削減に取り組むこと，
- ・発展途上国が，より環境に配慮した政策を実行すること，
- ・先進国が，発展途上国における環境汚染解決のために技術提供をすること，
- ・2012年までに，環境に配慮した製品に加えて，アジアの人々に対し安全な食品，水，住居，衣類，教育，医療を平等に提供し，社会的差別を根絶すること。

### **私たちは呼びかけます。**

皆さん，特にアジアの若者たち。  
スーパーへ買い物に行ったとき，  
何か気に留めることはあるでしょうか。  
値段，品質，それともカロリーでしょうか。  
環境に配慮した製品にはマークが記されています。  
皆さんはそれを意識していますか。  
環境に配慮した製品の存在を知り，  
それを選ぶ新たな習慣を身につけましょう。

### **私たちは信じています。**

アジア各国が動き始め，互いの国が支援しあう関係になれた時，  
アジア全体が今までにない，素晴らしいものとなるでしょう。  
それが，私たちアジアの若者たちが心から望んでいることです。  
ご清聴ありがとうございました。

資料4：宣言文のプレゼンテーションに対するカンタベリー大主教のコメント

The Archbishop of Canterbury speaks after ISC presentation

25 September 2009 at St. Johanness Hall, Momoyama Gakuin University

([?] indicates ambiguous text due to poor recording.)

May I thank you very gratefully and sincerely for this statement. I feel I am being privileged to hear your hopes and your concerns, and I hope that they will be heard more widely. Later this year, I shall be going to Copenhagen to speak at the summit there, and this is a document I shall want to take with me and share with the people in Copenhagen in the hope that there will be someone there who will listen.

In the last couple of weeks it has become more and more clear that many initiatives [?] of the Asian countries are now in a position to give leadership on this question, and I must say that perhaps even a year ago, I would not have been so hopeful. But the mixture of the public views about the leadership being shown by some Asian countries including the new government here in Japan, and what you have said and shared this afternoon gives me a sense that all the language we sometimes hear about Asia always being used by other countries as an excuse for doing nothing, that is in the past. I hope and trust that that is so.

I want just to touch on one or two points in the statement that seem to me to be especially important and significant. First of all I think that in your first section, what you believe, identified the root of many of our problems; “It is in our current human system to undervalue nature.” One of the problems we have to overcome is the fantasy that somehow humanity is not part of nature. People seem to think that human beings float in mid air over nature and look down on nature as they exploit it. But we are part of nature and part of the system of nature and to undervalue nature is to undervalue ourselves. I want to say that [by] a rediscovery, a vision of our responsibility of the environment, we also rediscover something about our human dignity and how God gave us a task as human beings within nature, not just to control it.

A second point is among your commitments; “To empower ordinary and socially disadvantaged people to become aware that their small effort does mean a lot.” Another of the problems we face is cynicism and despair - the challenge is so large that it’s not worth doing anything. And so we have above all to persuade every individual, however little power they seem to have, that every difference is a real difference. It may be small but it is real. And only by the building up together of those small differences is our mindset and our civilization changed and converted I would say, to use a very Christian word without any apology. So, that is a particularly significant commitment. Ordinary and socially disadvantaged people - if it’s true that socially disadvantaged people bear the heaviest cost as a result of environmental crisis and degradation, which I believe is true, then it is important also that they discover their dignity and their freedom in being able to take some steps. But of course, for those who do have the power and privilege, it’s crucial to remember that for who does pay the cost it is not welcoming [?].

There are many other things I would love to speak about at greater length. I’ll just take one more and that is going forward to your demands. Actually, perhaps I’ll take two of these just to comment on very briefly. The first is a very simple issue about transport; eco-friendly cars and eco-friendly public transportation. I believe that a great many problems can be resolved by putting pressure in these areas. Unfortunately these are areas where there are many vested interests; many people who have an interest in the way companies [?] are and are very unhappy about going with change. A change is brought about by consumer pressure and democratic demands in this and other areas. We have seen a little of what consumer pressure can do in changing the feeling around all of this, and where transport is concerned, I think it’s a very large part [?] I think, and I speak to you with feeling about this because it is an issue in Britain also and we have had a number of promises from governments over the years which have not been fulfilled about proper investment and eco-friendly public transport, so its not just an Asian problem but I mention it because I recognize it as being so urgent in my own setting too.

And the very last of those demands, food, water, shelter, clothes to wear. In the next fifty years or so, access to safe and healthy water supplies is going to be more and more of a priority in our world, as all of you know. And I'm particularly glad to see it mentioned here. Sadly it is possible that in this next generation, if we do not take care, access to safe water supplies will become a cause [?] of conflict; of violent conflict, in the world. We must exert all our energy to stop that happening, I believe.

So in summary, I want to say these statements and ideals represent a deeply challenging but a deeply hopeful sign. If it's true that we are beginning as a human family to wake up to the seriousness of our situation, then it is indeed your generation who will help to bring pressure to bear on governments or companies, on each other, and of course on people of my generation too.

So I thank you most sincerely for the work that this statement represents and for the vision which it embodies. I wish you every success in presenting these ideals to a wider company and in giving heart, and, to use the word again, converting our human family towards a sustainable future. Thank you very much.

### 【日本語訳】

2009年9月25日 桃山学院大学聖ヨハネ館ヨハネホールにて

この宣言に対し心より感謝の意を表します。あなたたちの希望と懸念を聴く機会を得たことをうれしく思い、これがより多くの人々に伝わればと思います。今年の末に、私はコペンハーゲンでの気候サミットに参加しますので、この文書を持参し、耳を傾けてくれる人がいることを祈って分かち合いたいと思います。

ここ1、2週間の間に、アジアの国々が先導してこの問題についてリーダーシップを発揮しようとしていることがますます明らかになってきました。こうしたことは1年前には考えられなかったことです。日本の新しい政権をはじめアジアの国々のリーダーシップに対する世論や、あなたがたがこの宣

言で述べたことを考えると、アジアの国々のせいにして自分たちはなにもしない、といった態度はすでに過去のものになりつつあるという気がします。そうであることを信じ祈ります。

宣言の中でとくに重要だと思われることについてひとつふたつ触れたいと思います。まず最初の項目の「私たちは信じています」のところで、多くの問題の根本を明らかにしているのが「現在の私たちの社会システムは自然の価値を過小評価している」という部分です。私たちがまず克服すべきことは、人間が自然の一部であるということをどういうわけか忘れてしまいがちである、ということです。あたかも自然の上の空中に浮かんで、自然を見下ろしながら搾取しているようです。けれど私たちは、自然の一部でありそのシステムの一部です。自然を過小評価することは、私たち自身を過小評価することになります。環境に対する人間の責任を見直すことで、私たちは人間の尊厳についてもなんらかの再発見をすることができ、神が人間に課したのは自然をただコントロールしようとするのではないとわかるはずです。

ふたつめに、あなた方の取り組みの中で「一般市民や社会的弱者に対し、彼らの小さな努力の積み重ねが大きな意味を持つことに気づいてもらうよう働きかけること」とあります。私たちが直面する問題のひとつに、一般市民の無力感と絶望があります。取り組まねばならないことがあまりに大きくて、何をしてもムダに思えるのです。ですから、私たちはなによりも人々に対し、どんなに小さいように思えても、生み出した違いはたしかな違いになるのだと説得していかなければなりません。たとえ小さくても、それはたしかな違いなのだ。そして、そうした小さな違いを共に積み上げることでしか、私たちの考え方や文明は変わらない。キリスト教的な言葉を使うなら、“改宗”できない、ということになります。ですから、これはとくに重要な取り組みになります。一般市民や社会的弱者に、ということですが、もし社会的弱者こそが環境の危機と崩壊の影響をもっとも受けるとすれば、そうであると私は信じていますが、ならば彼ら是对処するために自分たちも対策を講じることができるということに誇りと自由を見いだすことが大事です。もちろん、権力

と特権をもつ者は、影響を受ける人々がそれを歓迎していないということを認識すべきであるのは言うまでもありません。

まだまだお話ししたいことはたくさんありますが、あなた方の言う要求についてひとつだけコメントしましょう。いえ、ふたつ、ごく手短にします。ひとつめは交通に関する簡単なことです。環境に優しい車や公共交通機関について。この分野に圧力をかければ、非常に多くの問題が解決するはずですが。ただ残念ながらこれはまた多くの既得権益の存在する分野であり、企業のあり方に関して利害を持つ者が多く、変革には抵抗するでしょう。この分野や他についても、変えるには消費者による圧力と民主的な要求が必要です。こうしたことについて、人々の考え方を变えるのに消費者による圧力がどれだけ有効か、いくらかの例がありますし、交通に関してはとくにそうだと思います。私がこのように言うのは、イギリスでも同じ問題があり、何年も前から政府が約束しながら環境に優しい公共交通への投資が実現していないという現実があるからです。アジアだけの問題でなく、私のところでも対応が急がれる問題だと思うからです。

要求の最後にある、食料と水と住居と衣服という箇所についてですが、これから50年かそこらのうちに、安全で健康によい水の供給が世界の最重要課題になるであろうことはみなさんご存じの通りです。そのことにここで触れてくれていることをうれしく思います。悲しいことですが私たちの次の世代では、もし私たちがなんとかしなければ、安全な水の供給をめぐる世界では争いが、それも過激な争いが起きるでしょう。私たちは全力を挙げてそれが起きるのを止めなければならないと思います。

まとめると、この宣言文に書かれた理想は、非常に困難なものであると同時に、非常に希望を抱かせるものであると言えます。人類という家族として私たちがこの状況の深刻さに目覚めつつあるとすれば、まさにあなた方の世代こそが、政府や企業、同世代や、もちろん私の世代の人々に対しても、圧力をかけてくれることでしょう。

この宣言に至るまでのあなたがたの取り組みと、宣言が示すビジョンに対

し、心から感謝します。ここにある理想をより多くの人々に知らせ想いを伝え、また例の言葉を使うなら、人類を持続可能な未来へと“改宗”させることができるよう祈っています。どうもありがとう。

注：録音の音質が悪く、聞き取りの難しい部分は何カ所かあったが、内容に関して本人の確認は得られていない。間違いがあればすべては著者に責任がある。

## 資料5：最終アンケート集計結果

(\*印は英語で書かれたものを訳した)

### 【各プログラムの満足度】

#### 1. 導入講義, 映画「不都合な真実」とそれに続く討議など

大満足 7, まあまあ 3, あんまり 2, 全然 0

#### コメント

- ・\*よかったけど観たのは6回目です。
- ・人間開発と持続可能性について復習できてプログラムに入れたのはgoodだが、「不都合な真実」の効果はそれほど感じなかった。
- ・\*いませんでした。
- ・\*まだこの映画について考えています。結論は出ていません。
- ・\*観たことはありませんでした。衝撃的な映画です。
- ・\*もっと深刻な他の映画を観ればよかった。
- ・アル・ゴアさんに会いにいきます。
- ・心にくる言葉がたくさんあって、すごくためになりました。今の地球の姿がとてもわかりやすかったです。
- ・最初らへんのプログラムですごく緊張していた。でも自分の目標を決めてみんなと仲良くなったりディスカッションできてよかった。
- ・非常にわかりやすく心に残る映像でした。

#### 2. 大栄環境株式会社の見学(工場, 埋め立て地, 環境公園)

大満足 6, まあまあ 5, あんまり 2, 全然 0

#### コメント

- ・\*こういう施設を見れていい経験になりました。
- ・\*楽しかった!

- ・見学等は質疑応答を増やすとよいと
- ・ここまで本格的な事業を行っている会社があることにすごく驚きました。埋め立て地ではスケールの大きさに何も言えなくなりました。
- ・\*あいにくビザの遅れでいませんでした。
- ・びっくりした。
- ・\*韓国で同種の場所に行った。よかったけど。
- ・現状に起きている止まらないゴミ処理問題への対策としての社会を実際に見ることができてよかったです。信じられないくらいの技術で驚きました。この技術が日本のスタンダード、もしくは世界のスタンダードになればいいと思った。
- ・事前に関リサイクルについて学習してから行けばgoodだと思う。
- ・とてもすごく大きな埋め立て地を見てよかった。めったにない見れないところも見れてよい経験。

### 3. ホンダ鈴鹿製作所見学

大満足 6, まあまあ 4, あんまり 4, 全然 1

#### コメント

- ・\*もうちょっとゆっくりしたかった。
- ・もう少しゆっくり見学したかったです。だけど車を作る部分を見て思った以上にワクワクしている自分がありました。
- ・\*おもしろかった。自動車工場を見たのは初めて。すべてが驚きだった。
- ・\*時間がなかった。質問に対する先方の態度がいまひとつ。
- ・アシモくんに会いたかった。
- ・\*自動車工場を見たのは初めてだが、もっと見たかったし時間も足りなかった。
- ・見ることができたのがごく限られた部分しか見れず残念だった。
- ・行くのに疲れてしまった。疲れた分期待したが思ったより見学時間&

secretが多かった。

- ・車ができるところが間近で見れて面白かった！
- ・やっぱり写真撮影は禁止なんだと思った。もしも技術提供とかがあったら途上国もどうにかなるんだろうか。

#### 4. 堺エコタウンとATCグリーンエコプラザ

大満足 8, まあまあ 3, あんまり 4, 全然 0

コメント

- ・\*ATCではいろいろ見る時間がなかった。
- ・\*エコタウンというのは公園だと思ったら工場ばかりだった。
- ・ここは自由に見てそのあとに質問したかった。
- ・エコ活動にも様々な形があることがわかりました。そしてリサイクルの幅広さに驚きました。
- ・\*すごい場所で、いいところだ。教育的でもある。
- ・\*一度も開封されていない食品がリサイクルされていて驚いた。説明が丁寧で親切だった。
- ・花がきれいでうれしかった。(編集注：環境公園とまちがっている)
- ・\*時間がなかった。
- ・ゴミ処理場でのゴミの量(ムダに多い)にショックを受けた。現代に毎日生産されるものと捨てられる量をなんとかして減らすべきだと思った。
- ・見学時間が短かった。
- ・グリーンエコプラザはすごい楽しかったけど、見る時間が少なかった。
- ・昔から計画していたエコが今になって注目されていたのは嬉しいことだ。

#### 5. 紀泉わいわい村

大満足 12, まあまあ 2, あんまり 1, 全然 0

コメント

- ・\*すごくよかった。ありがとうございます！！
- ・\*楽しかった。
- ・\*もう一度いきたい！
- ・夜のミーティングのおかげで翌日からの自分の気持ち方が変わりました。皆でいろんなものを力を合わせてつくる、大変なことなのにすごく楽しくかったです。
- ・\*一生に一度あるかないかの体験だった。
- ・\*蛇がいたけど、自然の中で過ごせて特別な体験だった。
- ・あの空間はいつまでも残してほしいです。
- ・\*私たちの住んでいる世界は快適で美しい場所だと再確認した。
- ・環境教育（子供）や現代生活の便利さ、昔の生活の不便さと排出物への対策のなさに驚き勉強になった。
- ・キャンプをしたのは以前に何回も経験があるのでこれとって腑に落ちることはなかった。
- ・とってもきれいで面白かった。貴重な体験ができました。また行きたいです。
- ・様々な体験ができた。ここでみんながさらに仲良くなれた気がした。

6. 松尾寺植樹と竹林伐採

大満足 11, まあまあ 3, あんまり 1, 全然 0

コメント

- ・\*松尾寺でもっとゆっくりしたかった。
- ・\*木づちがほしい！
- ・木, 楽しみです。
- ・ほとんどのメンバーが初めての体験, 助け合う力の強さを感じました。環境に対して自分のできることがもっとあることに気づきました。

- ・竹を切るなんて、めったにできない体験ができてよかった。
- ・\*教育的で、学ぶことが多かった。それに生物の大切さがよくわかった。
- ・お坊さんの外人化には驚きました。(編集注：高野山とまちがえている)
- ・\*木を植えたのは初めてだった。何年か後に見に来たらいいな！
- ・記念樹を植えることができたことで、これからも春になればサクラと一緒にこのISCの思い出を思い出せると思います。
- ・楽しかったが、環境について学べたか疑問に思う。
- ・植樹ができて嬉しかったです。
- ・以前に一度竹を切ったことがあったので竹を切ることは簡単だった。日本の竹林のこと(森など)知ってから体験できてよかった。

## 7. 高野山, Sanjaさんらによる大伽藍見物など

大満足 7, まあまあ 4, あんまり 4, 全然 0

### コメント

- ・\*ふたりのガイドにたくさんの質問ができた。
- ・\*仏教を勉強したい。
- ・むずーい。
- ・疲れと寝不足でレクチャーを満身に受けられませんでした。高野山の案内も内容理解がほぼできませんでした。
- ・すごかった。
- ・\*行くと思っていた奥の院に行く時間がなかった。
- ・高野山は美しく、深い部分まで知れて知識として吸収できた。
- ・\*なぜあそこに行ったのか未だにわからない。行く理由が見当たらない。
- ・環境問題心バージョンを知れたのはgood
- ・高野山大学のレクチャーがむずかしくてわからなかった。観光楽しかった。
- ・見物は日本人の私でも知らないことが多く面白かった。レクチャーは英語でよくわからなかった。でもよかった。

## 8. 講義 日本の公害史

大満足 4, まあまあ 6, あんまり 4, 全然 0

### コメント

- ・\*英語が難しかった。
- ・日本の公害については皆知っているのだから、そこからどうつながるか。諸外国の公害も知りたい。
- ・あらためて日本の公害について学んだことで、いい振り返りの時間になりました。
- ・\*良かったと思う。日本の場合から学ぶことができてよかった。
- ・\*イタイイタイ病について興味深かった。(編集注：水俣病のはずだが)
- ・知っている知識が多くて微妙だった。
- ・\*歴史的な事実が知れて満足。
- ・過去にも環境問題があったことを再確認!!!
- ・元々知っていることを習った。

## 9. 講義 廃棄物問題と日本のリサイクル政策

大満足 5, まあまあ 3, あんまり 2, 全然 1

### コメント

- ・\*英語が難しかった。
- ・\*特別なことは何もなかった。知ってることばかり。
- ・リサイクル政策は感動した。
- ・\*あまり覚えていない。

## 10. 講義 空から見た世界の環境

大満足 12, まあまあ 2, あんまり 0, 全然 0

コメント

- ・\*もっと時間が欲しかった。
- ・\*JALで飛ぶようにしたい。
- ・すばらしい。あれこそ講義，プレゼン。
- ・自分の見たことのない世界を見ることができたこと，エコフレンドリーの飛行機があること，食器の軽量化など新しい視点で身近なものを見られておもしろかったです。
- ・すごい興味深かった。飛行機に乗るにもすごくCO<sub>2</sub>を出していることを初めて気づいた。
- ・\*JALはすごい。プレゼンがよかった。
- ・\*地球温暖化が深刻な問題であることがよくわかった。身近に迫っている。
- ・プレゼンテーションが上手くて感動した。
- ・\*すごくよかった。たくさんことが知れて興奮した。
- ・新しい視点からの環境の実態を見れるいい機会だったと思います。
- ・環境問題が牙を剥いているのを実感。
- ・すごくきれいな写真やわかりやすく興味をそそる内容ですごくよかったです。

11. 講義 現代日本の森林問題の歴史的起源とその構造

大満足 5, まあまあ 6, あんまり 1, 全然 0

コメント

- ・\*おもしろかった。
- ・\*木のかばんがほしい。
- ・木のかばんがほしいと思った。
- ・\*知っていることばかり。似たような講義を受けたことがある。
- ・日本の森林危機を知る
- ・意外な問題が日本にはあったんだと気づかされた。

## 12. 講義 空海と日本の自然思想

大満足 4, まあまあ 4, あんまり 4, 全然 2

### コメント

- ・\*日本語で話してほしかった。
- ・\*おもしろかった！
- ・内容が難しかったのと、疲れて集中できず、満足できませんでした。自己管理の大切さを感じました。
- ・\*哲学は面白い。
- ・\*空海や高野山と環境がどう関係しているのか最初わからなかったが、講義を聴いて、地球と人間の調和が必要であることがわかった。
- ・仏教には個人的にすごく興味があったので面白く学ぶことができた。伽藍を見たとき不思議な気持ちになった。
- ・\*あまり覚えていない。
- ・難しかった。日本語があればよかったと思う。
- ・よくわからなかった。難しかった。

## 13. ロイ先生によるワークショップ

大満足 12, まあまあ 1, あんまり 0, 全然 1

- ・\*すごかった。だけど疲れた。ワークショップに入る前に休みが欲しかった。
- ・\*すごく助けになった！
- ・非常に丁寧でよかったです。
- ・本当に面白かったです！！「なるほど、なるほど」と感銘を受けるばかりでした。全日集中して聞くことができてよかったです。
- ・すごく楽しかった。物事を多面的に見ることの大切さがわかった。今まで考えたこともなかった側面からの講義ですごくためになった。

- ・ \*すごい人だ。彼女の教え方がいい。将来彼女のような先生になりたい。
- ・ \*彼女は最高の先生だ！教えられたことをちゃんと理解できなかったかもしれないけれど、カリスマ性をしっかり吸収した。
- ・ 最初から最後まで神々しい人で、尊敬できる人であり、私もあの人くらい真剣に向き合いたいと思った、色々なことに。
- ・ \*ワークショップからいろんなことを学んだ。すごく特別な講義だった。何度でもこんな授業を受けたい。
- ・ 今までやったことに整理をつけることができ本当に良かったです。
- ・ 本当にありがとうございます！たくさん学べました。
- ・ 本当に大変だった。でもこの3日間があったからこそ宣言文ができた。

#### 14. 宿舎には満足しましたか

大満足 8, まあまあ 4, あんまり 2, 全然 0

#### コメント

- ・ 洗剤とかおいて。
- ・ 自分を強くしてくれた時間でした。自分の成長をととても感じています。
- ・ \*何から何まですばらしかった。
- ・ \*昼はあまり好きではない。
- ・ 仲良くなれた、みんなと。
- ・ \*部屋に人が多すぎる！毎日みんなあまり眠れなかったのでは。
- ・ 空気悪い。
- ・ 本当に満足です。お金出してないのにここまできちんとしてもらって本当に感動です。

#### 15. 食事には満足しましたか

大満足 7, まあまあ 4, あんまり 1, 全然 1

コメント

- ・ \*大学外での食事がもっとあってよかった。
- ・ あるだけ十分。
- ・ 少し味が濃いものが多かったので少し疲れました。だけど毎日おいしいご飯をいただいて感謝でいっぱいです。
- ・ \*食事はいつもおいしかったです。
- ・ \*毎日自分で作るものよりずっとよかった。ありがとうございます。
- ・ 毎日ありがたかった。感謝。
- ・ \*おいしかった。期間中に太ったかも。
- ・ 味が悪い。スープむちゃからい。
- ・ 毎日ご飯をありがとうございました。でも量が多すぎるときも多々ありで困りました。

16. 2週間という長さは

長すぎ 2, 短すぎ 4, ちょうどいい 8

コメント

- ・ \* 2週間以上あったら病気になっていたと思う。
- ・ \* もっと！！
- ・ これより短いと得るものが少ない。長いと皆もたない。
- ・ もう少し時間が欲しかった！と思うことがありました。だけど2週間という期間だからこそ得られたものもたくさんあるように思います。
- ・ \* 良かったと思うけど、もうちょっと長くても良かった。
- ・ \* もう少し自由時間があればリフレッシュして体も休めた。
- ・ 長いけれど、真剣になれた。
- ・ \* 3週間あれば良かった。ちょっと短い。
- ・ もう少し長くてもいいかと感じた。
- ・ 体力的にきつかった。

- ・ すごくハードなときを過ごしました。だから2週間以上だときついと思います（心身ともに）。でも短いとも思います（今だからそう思うのかも）。

17. 一番強い印象を与えたもの（こと）を教えてください。

- ・ \*行動せよ！
- ・ \*このキャンプの友人たちとの討論
- ・ \*日本の友人たちは私を心から歓迎してくれ、とても居心地良く過ごさせてくれた。
- ・ 語学力の無さ、知識、経験の乏しさ、地球の危機
- ・ メンバー全員がメンバーひとりひとりを認め、受け入れていたこと。
- ・ ロイ先生のワークショップがいちばんおもしろかった。
- ・ \*巖先生の忍耐力
- ・ \*私たちには責任がある。自分のする全てのことに責任を持たねば。
- ・ \*高野山大学の講義。博物館にもすごい美術品があった。
- ・ ジョイ先生、インパクトのある人があんなに一生懸命ついてくれて嬉しかった。生きようと思った。
- ・ \*環境についてあまり学べなかった。
- ・ 紀泉わいわい村。この日に全員の意見がわかって知ることができた。
- ・ ロイ先生の講義。本質的に学べてよかった。
- ・ 全てが印象強くて決められません。ただ思うことはみんなすごく自分の意見を持っていることに感動。

18. 一番困ったことを教えてください。

- ・ \*やっぱり言葉。
- ・ \*食事
- ・ \*なにもありません！
- ・ やはり語学の面、情報の共有
- ・ 自分の英語力！！！！です。

- ・スケジュールが詰まりすぎているところ。実際に参加するまで、スケジュールの詳細がわからなかったこと。
- ・\*眠れない夜が続いた。
- ・\*カメラをなくしたと思った。かばんの中にあったけど。
- ・\*べつに。個人的な問題！
- ・\*毎日休みがなかった。
- ・疲労。ラスト5日間ぐらいからやるのがかなり多くて体力的にまいってしまった。
- ・みんながバラバラになりそうになったとき。困ったとき。前に進めないと思ったとき。

**19. 全体として満足な点、不満な点を書いてください。今後のための提案があればお願いします。**

- ・\*満足な点：見学研修。自然を体験できた。不満点：全員と知り合うには時間が短かった。
- ・\*もっと休憩と眠れる夜が欲しかった。1日はオフがほしい。いいメンバーだった。他の国から参加者がいたことがよかった！！
- ・\*すべてすばらしかった。計画は最高！ あえていうならもっと多くの国から参加者を。そして長く。
- ・もすこし慎重にプログラムを進めることを提案します。  
何より世界に訴えるチャンスくれたことに感謝します。
- ・少し予定がつまりすぎて、みんなの疲れがピークだったように思います。ステイトメントを作成する時間ももう少し余裕が欲しかったかな、と感じます。しかし全体を振り返ると、すべての時間が充実しており、とても満足しています。
- ・講義のスピードが速かったので、もう少し考える時間が欲しかった。
- ・\*とてもよかった。最後のプレゼンはもっと中身があっても良かった。
- ・\*プログラム全体はよかった。だれもが優しく思いやりがあった。このよ

うな研修が今後も続き、アジアの全ての国に支持されるといいと思う。もっと多くの講師やゲストを呼び、情報も活動ももっと多く。参加者も教員もスタッフももっと。多ければ多いほど楽しい。

- ・外人と日本人の比に差があり過ぎ。
- ・\*もっと多くの国から来てほしい。時期が悪いと思う。時期を選ぶべき。次はもっと多くの国から呼ぶべき。
- ・リフレクション、ディスカッションの時間がもっとあれば良かったなと思います。フリータイムもさらに多い方がいいと思う。
- ・宣言文をつくる時間がもっと欲しい。  
先生方のお話がとても心にしみました。サポートありがとうございます。全体の振り返りが少なすぎたのはとてもイタイ。するべきである。
- ・かぎはきちんと保持しておかなくてはいけないですね。誰が持っているか把握しておくこと。

## 20. あなた自身のどんな面がこのプログラムによって変化したり影響を受けたりしたか教えてください。

- ・\*将来やりたいことがはっきり決まりました。環境のためになにができるかわかりました。
- ・\*自分について考える時間が得られた。自分の心がわかった。他の国の人のことを知れてよかった。全てのメンバーに感謝。
- ・\*他の人の意見に敬意を払うこと。自分の中のリーダーシップを見いだした。新しい友人に出会えた。永遠に大切にしたい。
- ・力の無さ、これからの道が少し見えた。止まりません。
- ・人に自分自身をさらけ出すこと、積極的にものごとに取り組む姿勢、とにかく前に進む勇気をいただきました。
- ・最初、工場見学をしているときは何のためになるのか疑問であったが、ロイ先生の講義を受けて、物事を多面的に見る力が必要であることに気づいてからは、工場見学に行った意味が少しわかった。

環境に関する知識はもちろんだが、リーダーシップのとり方、チームを一つにしていく方法等を実際に見ることで、良いところ、違う方法の方が良いと思うところが色々あった。普段の生活に戻っても、この経験を生かしていきたいと思う。

- ・\*自分の生き方はこれからエコフレンドリーになる。
- ・\*私は個人的に、精神的に、感情的に、哲学的に、社会的に変わった。これからの人生にとって大切な変化だ。フィリピンに帰ったらここで学んだ全てのことをみんなと分かち合いたい。そして変えてみせる。行動する。いっしょにやろう。
- ・環境のことだけに、こんなにも時間を割くことができ本当に嬉しかった。苦しいこともあったけど、その中で自分が強くなれた。
- ・\*英語については後悔している。もっと勉強しないと。とくにしゃべることに。
- ・環境に対する知識が増えたのは確かだけど、それ以上に他のメンバーを良く見ることや、まとまるように促すこと、リーダーシップをとることの大切さなど、普段ではなかなかない経験ができた。
- ・このプログラムの前、Tグループにより感情のやり取りを知る。このプログラムでもたくさんのが起きた。

1. ラストのプレゼンできん→くやしい。もっと自分を磨く。
2. いいメンバーと出会えた→嬉しい。人を大切にしたい、もっとそうできる人になりたい。

ポジティブな感情をもっと表現できるようになりたい。もっとできるようになりたいと強く感じるようになった。

このメンバーで最後まで自分のこれだという役割をみつけだせなかった。これをよいスラップにしたい。

Summary Report of The International Study Camp 2009 in Osaka  
“The Environment and Sustainable Development in Asian Countries”

Keisuke IWAO

Haruhisa ISO

Takaaki David ITO

A study camp was conducted at Momoyama Gakuin University for two weeks in September 2009. Twenty-two students from 6 universities of 4 Asian countries gathered together to learn environmental issues and sustainable development. After many lectures and field trips to learn various aspects of environmental issues in Japan and Asia, they had a three-day workshop to produce their own statement. The statement was presented to the Archbishop of Canterbury and received a favorable comment. Two of the participants were then sent to the climate summit COP15 held at Copenhagen in December.